

# 白樺姫

## 〜ヒラニワ高原の桃源郷〜

作 こむろこうじ

### 【登場人物】

#### 《ラクヨウ（落葉・洛陽）族》

- シラカバ（カバノキ属）：ラクヨウ族の姫、
- カシワ（コナラ属）：ラクヨウ族の長老。かなりの高齢。
- カンバソウシ（カバノキ属）：ラクヨウ族の重臣、心臓が弱い
- カンバウダイ（カバノキ属）：ラクヨウ族の重臣、喘息持ち
- アズサ（カバノキ属）：ラクヨウ族を影から支える女忍者的な存在。
- シロブナ（ブナ属）：顔に大きなやけどのケロイドがある。
- クロブナ（ブナ属）：目が悪いが、その他の感覚が研ぎ澄まされている。
- コナラ（コナラ属）：右足が悪い。アズサの親友。
- クヌギ（コナラ属）：考えることは苦手だが、めっぼう力が強い。
- モミジ：ラクヨウの子。耳が不自由。
- カエデ：ラクヨウの子。走るのが苦手。
- マユミ：ラクヨウの子。物を持ちたりつかんだりすることが苦手。
- ミズキ：ラクヨウの子。元氣。強氣。走り出したら止まらない。
- サクラ：ラクヨウの子。人が話したことをオウム返しする。
- アベマキ：ラクヨウの子。足が速い。考えるより、まず走る。
- ツバキ：ラクヨウの子。うんうん。うなずいている子。

#### 《シンヨウ族（針葉・信備）族》

- 1 0 3（ジューゾー）：シンヨウ族のリーダー【アスナロ】
- 5 6 3（ゴロザ）：シンヨウ族の参謀【イチイ】
- 6 3 4（ムサシ）：シンヨウ族の知恵袋【スギ】
- 7 2 3（ナツミ）：シンヨウ族のスナイパー【クロマツ】
- 6 2 3（ムツミ）：シンヨウ族のスナイパー【アカマツ】

#### 《親子》

- 悔悟 老人（父）：半身不随で車椅子生活を余儀なくされている。  
元森林組合職員
- 堅那子 母（娘）：父の介護と息子の世話で、途方も無く疲れている。
- 沙磐 子（息子）：自閉症の子。記憶力抜群。

## 白樺姫（プリンセス・シラカバ）

〜ヒラニワ高原の桃源郷〜

【あらすじ】

ラクヨウ族は、平庭高原に先祖伝来住み続けている小人属だ。彼らは、人間と接触すること無く、その存在を人間に知られることも無く、ひっそりと生活を営んでいた。

しかし、小人属の中には、人間に近づき種族を発展させようとしているシンヨウ族という種族もあった。二者は、相容れること無く、好戦的なシンヨウ族がラクヨウ族の村の焼き打ちを計画する。難を逃れるため、ラクヨウ族は、平庭の大地から内間木の洞窟内にある隠れ里に逃げ延びる。

その頃、父の介護と自閉症の息子の世話に疲れ果てた女性、堅那子は、父と息子を連れ、平庭高原を訪れていた。

三人は、崖で足を滑らせ、法面にできていた、穴に落ちてしまう。その穴は、ラクヨウ族の隠れ里に通じる抜け穴につながっており、ラクヨウ族の子どもたちと出会う。三人はラクヨウの子どもたちの案内の元、隠れ里に舞い込んでしまう。ラクヨウ族の小人たちは、それぞれが身体に不自由さを有するが、それをそれぞれの特長ととらえ、負担にも感じずお互いを尊重して生活していた。

三人は、小人族と触れあううちに次第に親しくなっていく。

その頃、全滅させたはずのラクヨウ族が生き延びていることを知ったシンヨウ族は、抜け道を発見し、ラクヨウの隠れ里を襲撃することを企てる。果たして、ラクヨウ族は、生き延びることができるのであろうか。

そして、シンヨウ族は何のために、ラクヨウ族を滅ぼそうとしているのだろうか。

小人族の世界に紛れ込んだ三人の人間は、もとに世界に戻ることができるのだろうか。

### 【ラクヨウ族とシンヨウ族の変遷】

『ヒト』が、このヒラニワの大地にやってくる昔々のそのまた昔、シンヨウ族もラクヨウ族も、お互いを尊重し合い共存しながら、ヒラニワの大地で暮らしていた。

ヒトが現れた後も、ヒトは山を敬い、使う分だけの木をつましく、大地からいただき暮らしていた。

しかし、人間の数が増え、その生活も豊かになりだすと、その様相は一変した。

炭として使うことができるラクヨウ樹は、どんどん切り出され、裸の山には、木材として使用可能なシンヨウ樹がどんどん植えられていった。

共存共栄を図っていたラクヨウ族とシンヨウ族の関係も、ここで一変した。

シンヨウ族は種の保存と拡大のために、ヒトにとり入り、その勢力を拡大する路線を取った。

一方、ラクヨウ族は人間とは接触せず、人間には利用価値の低い王族のシラカバを大量に育成することに、ラクヨウの森を守る決意をした。

かくして、『ヒト』の知らぬ勢力の中で、ヒラニワの大地は、シラカバ族を王として山を守るラクヨウ族と、人間に取り入り植林を介して勢力を広げるシンヨウ族とに二分され、今もなお存在し続けている。

舞台は、前方と後方の2ステージでの構成とする。

前方の演技エリアは、小人族（ラクヨウ族）のエリアとなる。舞台後方は、『ヒト』の演技エリア、またはシンヨウ族の演技エリアとなる。

前方と後方では、会話をすることはあっても、基本的な縮尺が違うので、お互いのエリアに入り込むことは無い。

小人族の縮尺は、『ヒト』族の10分の1。平均身長16cm～17cmといったところ。

この縮尺の感じは、ことばでの説明ではなく、舞台美術での落ち葉の表現、役者の視線、小人と『ヒト』が並び立つ時には、『ヒト』の台詞へのエフェクト操作（声にリバーブをかけて声に重さと響きを持たせる）等によって、その差異と、縮尺の違いを感覚的にとらえられる表現をしたい。

小人族の隠れ里である洞窟内は、観客席も演技エリアであるので、舞台美術は、ステージ上だけでなく、会場の中にも、洞窟内部の様相を醸し出す仕掛けをし、会場に入った時点で非日常の中に観客が誘われる工夫を施したい。

また、場面の状況を感覚的に感じ取れる匂い（焼け焦げる匂い、等）も、会場内に漂わせることが可能であれば検討してみたい。

第一景 紅 炎のヒラニワ

バチバチと生木が燃えて爆ぜる音が聞こえる。

焦げ臭いにおいが辺りに充満してきた。

舞台後方に五人のシンヨウ族の小人たちの影が映し出される。

1 0 3 状況はどうだ。

5 6 3 予定通り。

6 3 4 計画にはぬかりはありません。

7 2 3 風下の橋は全て落としました。この山はすでに孤立しております。

6 2 3 火は風上から放ちました。今日の風の状況ですと、おそらく数刻の内に

ラクヨウの里は燃え尽きるものと。

1 0 3 よし。その後は、我がシンヨウ族がこのヒラニワの郷を一手に治めるこ

ととなる。ひよわな者たちは滅びるべきなのだ。

5 6 3 次の計略は…。ラクヨウ族が、全滅したのち、我等の仲間をヒラニワ

の郷全てに配置することになっております。

6 3 4 それも、『ヒト』の手は借りずに、我々の手のみでな。

1 0 3 抜かりなく、頼むぞ。

7 2 3 ・ 6 2 3 はっ。

五人の影は消え去る。

代わりに闇の中に、森の中の炎が広がり始める。

炎に映し出されるように別の人々（ラクヨウ族）のシルエットが舞台前方に浮かび上がる。

炎の照り返しの光に、一人の女の子が笑顔で座っている様子が映し出される。周りで、数人の人々が追いつめられた表情でたたずんでいる。

一人の女（アズサ）が、そこへ駆け込んで来る。

アズサ 申し上げます。村に火が放たれました。

カシワ 我等を全て燃やしつくし、歴史の舞台から消し去ろうとしているのじやな。

ウダイ もはやこれまで…。（咳き込む。）

カシワ 諦めるでない。

ウダイ ラクヨウ族も、我々を残すのみ。

ソウシ せめて、姫を生かさなければ…。

周囲の焦燥感とはうらはらに、中心に座す少女はやけに明るく、笑顔を振りまいている。

シロブナ 姫の笑顔にはいつも救われていますが…。

アズサ 今日だけは、その笑顔だけは、無垢なだけ哀しいものがございます。

ソウシ 洞窟に下るぞ。

クヌギ 洞窟？

ウダイ 一族に有事がある時に、しばらく暮らすことができる隠れ里を、麓の洞窟の中に作ってある。

ソウシ 今、ここで戦ったとしても、勝ち目は無い。一旦、引き、好機を窺うこととしようではないか。

アズサ 村を捨てるのか。

カシワ 今たみは、民を救すくうことこそ肝かん要ようなことじゃ。

ソウシ それに、我等われらは何があっても戦たたかってはならん。

アズサ そうやって、耐たえ忍しのんで、何の得とくがあつたというのだ！

ウダイ 堪たえよ、アズサ。

アズサ わかりません。命いのちを投げうってでも、耐たえ続ける。その意味がわかりません。

カシワ アズサ…。

シラカバ じい。

カシワ はい。

シラカバ どこに行くのじゃ。

カシワ 穴あなの中なかにございます。

シラカバ 穴あなの中なかは面白おもしろいか。

カシワ つるりと滑すべる場所もあつて、楽したのししうございます。

シラカバ 楽しい？

クロブナ 楽しいのですか？

シラカバ 楽しさは、人それぞれ…。俺にとっては、面白くない。

シラカバ 面白くなければ、行かないぞ。

ソウシ クロブナ！

クロブナ 俺の気持ちを言ったのみ。

ウダイ …そうじゃな。

シラカバ ジイはどう思う。

カシワ 私は、行ってみたいと思います。

シラカバ そうか。…では行こう。

ソウシ 姫さま。

シラカバ 早く行こう。つるつるして遊ぼう。

ウダイ …姫もこう申しておる。行くぞ。(気が変わらぬうちに…)

クロブナ 御ぎ意い。

クヌギとコナラ、話をしながらその場にやってくる。

アズサ シンヨウの追っ手が、もうすぐここへの通り道を見つけるところだ。  
クヌギ 戦たたかうか。

コナラ 今、戦ってしまえば、今までがまんしてきたことが無駄になる。  
クヌギ では、どうすればいいんだ。

コナラ ソウシ様・ウダイ様、我々はどうすれば…。

ソウシ 他人を傷つけてまで、生きながらえる事は美徳ではない。

ソウシ、 胸を抑えうずくまる。

コナラ ソウシ様。

ソウシ 案ずるでない。いつもの病だ。

コナラ しかし…。

ソウシ 生きている者は、時が来ればいつかは死ぬるものだ。命運が尽きる

まで、郷を守るのが我が務め。

コナラ …ソウシ様。

クヌギ 郷を守るため、戦いましょう。

ウダイ 『争うくらいならば、滅びよ。』我らラクヨウ族のおきてじゃ。

クヌギ くそお、口惜しい。

アズサ 皆、穴を通して逃げるがよい。

シロブナ いざという時の抜け穴か。

クロブナ しかし、穴はシンヨウ族にすぐ見つかってしまう。

アズサ 案ずるな。皆が奥深くまで逃げおおせたら、火薬で穴を閉じる。

クヌギ でもそうしたら、お前が…。

アズサ 必ず、後から追い付く。

コナラ アズサ…。

アズサ みな、姫を頼む。

アズサ、 赤々と燃えさかる炎の方へ消え去る。

シロブナ アズサ。  
ソウシ さあ、行くぞ。

クロブナ 我らにも、シンヨウ族にひと泡吹かせられるだけの力はある。  
クヌギ だから、戦おうではないか！

カシワ 本当に力のあるものは、その力で相手をねじ伏せたりはせぬ。

コナラ アズサだけを犠牲にするのか！

ソウシ 皆がもどって、息絶えたならば、アズサの行動を無にしてしまう。

クロブナ アズサを見殺しにして、生きながらえるというのか。

ウダイ そんな、道を選ばなければならぬこともある。

シロブナ しかし…。

クヌギ 穴を抜ければ安全なのか？

ソウシ 抜け穴に入れば、そうたやすく奴らに追いつかれることは無い。

ウダイ 気配をかくす仕掛けも多くつくっておいた。そう、やすやすと、我等

の隠れ家にたどり着くことはできん。(咳き込む)

カシワ ラクヨウの知患者、カンバ兄弟がそう申しておるのだ、大丈夫だ。

ソウシ 案ずるな。

ウダイ 参るぞ。

カシワ アズサの想いを無にせぬためにも…。

シロ・クロ・コナラ・クヌギ …はっ。

姫を連れだって、ラクヨウ族の小人たちは、穴の中の隠れ里に、逃げ始める。

次第に、炎が広がり、紅く照らし出された景色の中、小人たちの落ち伸びる姿は、シルエットに代わってゆく。

しだい ようあんてん  
次第に溶暗転

と、赤々と燃えあがる炎の色と共に、轟音の爆発音が数発響き渡る。

## 《M2》

タイトル『白樺姫』が、スクリーンに映し出される。

## 第二景 若緑 沙磐と家族の風景

場面は変わって、小高い丘の上。舞台中央より後方に、山を切り開いてつくった駐車場スペースとおぼしき場所が設定してある。自然光を中心とした人間の光が、辺りを包みこんでいる。

駐車場の端に展望スペースが設置してあるといった場所である。

車椅子を押す一人の女性。髪のはつれに、生活へ疲労感をどんよりとにじませている。

車椅子には初老の男性が一人。体の左半身が不自由であることが窺われる。

女性の脇には、一人の少年。うつむき加減にどこを見ているとも判然としない視線を投げかけつつ、左手をひらひらさせながら、女性のすぐ後ろについて歩いている。

老人、息を大きく吸い込んで話し出す。

老人 『白樺の密林は今竖琴を、夕陽に立てて旋律に鳴り』

少年 シラカバノミツリンハイマタテゴトヲ、ユウヒニタテセンリツニナリ。

老人 沙磐はすぐ何でも覚える。すごいなあ。

沙磐 サバンハスゴイナア。

老人 この近くに歌碑も建てられている有名な歌だ。知っているかい。

女 知りません…。

老人 …そうか。

女 もしかして、聞いたことがあるのかもしれないですが、思い出せません。

老人 そうか。

老人、遠くの景色に目をやる。

老人 このあたりは、白樺がたくさん生えていて密林みっりんになっているんだろうけれど…。

少年 ミツリンニナッテイルンダケレド。

老人 霧きりに包つつまれて、周まわりの様子がよく見えんなあ。

女 そのままね。

老人 何だ？

女 私の気持ち…。

老人、女を見やる。

老人 どこまで行くんだ。

少年 ドコマデイクンダ。

女 さあ、どうしましょうね。

老人 疲つかれたな…。

少年 ツカレタナ。

女 私も、…疲つかれました。

老人 もう、ここで良いだろう。

少年 ココデイイダロ。

女 そうですね。ここでいいですね。

三人は、崖がけのつきでた突端とつたんに位置いちする。女、車椅子にブレーキをかけて、老人の脇わきにしゃがみ込む。少年は、車椅子の後ろでふらふらしている。

老人 緑色の空気を吸すったのは、久々だ。

沙磐 ミドリイロノクウキ。

母 空気に色なんか無いわよ。

老人 良いじゃないか。そう感じたんだから。

沙磐 イイジャナイカ。

老人 森が吐はき出したばかりの酸素がたくさんある場所だ。色がついていたっ

ておかしくない。

母 お父さんらしいね。その表現。

老人、大きく深呼吸しんぷいをする。

老人 車の運転ができなくなって、外に出ることも無くなったからな…。森林しんりん

組合くみあいで働はたらいていたころは、山の中の道もブンブン走り周まわっていたものだ  
がな。

母 お父さんが休みの日は、よく二人でドライブに行ったわよね。

老人 北山崎きたやまざきとか

母 浄土ヶ浜じょうどがはまとか

老人 山田の遊園地ゆうえんち、マリンパークヤマダとか…。

母 あったわね。そんなところ…。

老人 その帰りにガス欠けつになって、カッコ悪いって、お前にしこたま怒おこられた。

母 そんなこと、怒おこったって仕方しかたないのにな。

老人、しんみりとして。

老人 こんな体になって、悪かったな。

母 謝あやまられると、かえって心が苦しくなるじゃない。

老人 そうか…。

沙磐、突然しゃがみ込み、自分の足元の草地くさちをたたきだす。

母 沙磐。何してるの。

沙磐 チカスイミヤク（地下水脈）。セツカイガンシツ（石灰岩質）。

母 何なの。

老人 沙磐は、ここの土地が石灰岩質せっかいがんしつでできているから、地下で、水が流れてい

ることを発見したんだ。沙磐は、賢かしこいなあ。

母 賢い？

老人 そう、賢い。

母 自分の世界だけで遊んで、他の人とコミュニケーションを取ることができない、そんな子のどこが賢いって言うの。

老人 人には持てない知識ちしきを身につけることができるだろう。

母 そんなの賢いって言わないわ！

老人 ……そうか…。

母 この子が、こんなじゃなきゃ、あの人だって…。

老人 それと、これは別だろう。みんな沙磐のことにしてしまっただけは、かわいそうだ。

母 私が悪いんです。

老人 そうは言っていない。

母 みんな、みんな、私のせいなんです。沙磐がこうなったのも、あの人がいなくなった事も、父さんがこうなったのも…。

老人 一人で、背負しよい込むな。

母 でも、

老人 俺の体のことは、自分が悪いんだ。調子が悪いのはわかっていた。しかし、そのままほうっておいたのは自分のせいだ。

母 沙磐のことで精いっぱい、お父さんのことまで考えられなかった。ごめんなさい。

老人 決して、お前のせいではない。

母 優しくやさされると、かえって辛いつらいわ。

母、なみだ涙ぐむ。

沙磐 ソウシカンバ、ウダイカンバ、シロブナ、クロブナ…。

老人 わしは、学が無いからな。物を知っているという事は素晴すばらしいことだと思おもうのだがな。

沙磐 カシワ、コナラ、クヌギ…。みんな泣いてる。

母 泣きたいのは私の方よ。

沙磐 シラカバは…。

老人 シラカバは？

沙磐 笑ってる。

老人 笑ってる？

沙磐 ずうっと笑ってる。

老人 シラカバは偉いなあ。

沙磐 シラカバはエラい？シラカバはエラくない？

老人 偉いのかなあ。偉くないのかなあ。

沙磐 …シラカバはエラくない。

老人 どうしてシラカバは偉くないんだ。

沙磐 シラカバエラくない。わらってる。

老人 笑ってるから偉くないのか。がんばって、無理して笑ってるのかもしれないぞ。

沙磐 がんばらない…。でも笑ってる。

老人 そうか、沙磐にとってはがんばっている人が偉いんだな。沙磐は、お母さんに認めてもらいたくて、がんばってるんだ。

母 えっ。

沙磐 サバン。エラくない。エラくないけど、がんばる。

老人 がんばる人が偉いからか。

沙磐 がんばる人はエラいから。がんばる。

老人 沙磐。無理してがんばらなくても良いぞ。じいちゃんは、そのままの沙磐が大好きだ。

沙磐 サバン、ダイスキ？

老人 そうだ。沙磐、大好きだ。

母 お父さん…。

老人、近くの山林から煙がたなびいているのを見やる。

老人 山火事かな。結構、広い範囲で燃えているな。

沙磐 カジこわい。

老人 そうだな。火事は怖いな。

母、二人から離れ、ゆっくりと語り出す。

母 父さん、あのね、実はここに来たのは、3人でここから…。

老人 言わなくても良い。…言わなくても良い。…すまない…。

母 謝って欲しいわけじゃないわ。

老人 わかっている。わかっているけど、どうにもならん。

沙磐 イヤ、ソウカモシレナイ。

母、沙磐に目を向ける。

沙磐 アツ。チヨウチヨ。

沙磐、崖の前に飛び出しかける。

老人 危ない！

老人、車椅子から立ち上がり、沙磐を捕まえるが、二人の体は、もつれるように重なり倒れかける。

驚いた母は、その二人を抱きか抱えるように捕まえるが、踏みとどまることはできずに、三人は中空に倒れかけ…。

暗 転

### 第三景 紺碧 追手

景色は、火事で、焼け残った山林の風景となる。森のあちらこちらで火がくすぶっている。

シンヨウ族の4つの影が現れる。

6 3 4 居たか。

7 2 3 居ません。焼け跡も、くまなく探しましたが、ラクヨウの者たちの焼け体さえも残っていません。

5 6 3 四方から火をかけたのだ。逃げられるはずは無い。

そこへ、6 2 3がやってきて、ひどますぎ報告をする。

6 2 3 申し上げます。郷の中心部に、穴の跡が…。  
1 0 3 穴の跡？

6 2 3 何やら、爆破によって山が崩されたらしき怪しい場所があったもので、

掘り返してみたら…。

5 6 3 掘り返してみたら？

6 2 3 抜け道らしき穴の跡が見つかりました。

5 6 3 その穴を使って逃げ伸びたか…。

7 2 3 でも、山を崩すため爆薬をしかける者が残っていたはず。

6 2 3 郷には四方から火をかけた。逃げ道は無いはず。

1 0 3 ラクヨウにはカンバ兄弟という、知恵者がおる。何か策を練ったのであ  
ろう。

5 6 3 姫を逃がすために、誰かが犠牲になったということも…。

1 0 3 仲間のために自分を犠牲にすることをいとわない種族だ。

6 3 4 現に、ヒラニワでは、他の種族を犠牲にしてまで、シラカバを残し、ラ

クヨウ族の生き残りを図った。奴らならそれもあり得る。

6 2 3 穴らしき場所の中では、石が崩れており、その中に踏み込むことは無理  
かと…。

5 6 3 それだけ石の多い場所であれば、長い抜け道を掘ることはたやすくは  
無いのではないか。

6 3 4 ここは、石灰岩質の大地。少し掘り進めば、洞窟はいくらでもある。

初めから村の中心地に洞窟につながる入口があったのかもしれない。

5 6 3 ラクヨウ族、なかなか侮れませんな。

6 3 4 逃げ延びたとみてほぼ、間違いは無いな。

1 0 3 早々に、抜け道につながる穴を見つけたして、奴らを追うぞ。

7 2 3、6 2 3 はっ。

7 2 3、6 2 3、風のごとく走り去る。

暗雲あんうんが立ち込め、辺りあたは暗くらくなる。

1 0 3 まず、ラクヨウ族を根絶ねだやしにせねばならない。我々『小さきものたち』の『本当のしあわせ』はその先にしかない。

5 6 3 我々、シンヨウ族の発展はつてんのためにも。

6 3 4 早急そうきゅうに……。

暗雲あんうんが更に立ち込め始め、3人の姿が見えなくなりかける。雷鳴らいめいが鳴り響き、

稲光いなひかりがほとぼしると、3人の姿は、稲光のシルエットとして浮かび上がる。

火事はっせいが発生した上、昇気流じょうきりゅうのせい、雨が降り出す。

雷鳴らいめいと雨の音が響き渡る中……。

暗 転

#### 第四景 純白じゆんぱく 沙磐と子ども小人

雨の音は、次第に小さな音になり、地下水脈ちかすいみやくの流れの音になる。

暗闇の中、舞台後方にほわあつと、白い岩肌いわはだが浮かび上がってくる。岩肌の前には老人と少年、女が倒れている。傍らかたわには転倒した車椅子もある。

舞台前方にも明りが入る。そこに、小人属の子ども（モミジ、カエデ、マユミ、ミズキ、サクラ、アベマキ、ツバキ）の7人の小人族の子どもが現れる。

※ ここからの場面は小人族と人間の縮尺しゆくせきが違う。会話があっても直に接するかじことは無い。『ヒト』は、15。mほどの小人に話しかけるつもりで演ずる。小人は、15 mほどの巨人に話しかけるつもりで演ずる。

小人族の子どもたちは、三人に近づき（会場前方上に人がいることを想定したパントマイムで）恐る恐るつつくらしき行動をするが、ミズキ、猛ダツシユで飛び離れる。

それに、つられるように、他の6人も逃げ去る。カエデこける。モミジは、その場に立ちすくむ。ツバキはその脇でうんうんうなずいている。アベマキは、側転をして身構える。

モミジ う・ご・か・な・い・よ。

ツバキ うん。うん。

カエデ びっくりしたなあもう。

アベマキ おどかすんじゃないよ。まったくもう。

ミズキ だって、怖いんだもん。

アベマキ あんたにも、こわいものがあるんだ。

ミズキ 何言ってるのよ。こんなかわいい女の子に失礼でしょ。

カエデ、足をさすりながら立ちあがる。

カエデ 転んじやったじゃない。

ミズキ あっ。ごめん。

再度、マユミとカエデが近づく。

マユミ 息してますかあゝ。

カエデ 息してますかあゝ。

サクラ いきしてますか。

モミジ、案外冷静に近づいて、体に触れてみる。（仕草をする）

モミジ 温かいから、生きてます。

ミズキ、かなり遠い位置から。

ミズキ 生きてます。

カエデ そんな遠くで、言われてもねえ。

アベマキ あんたも、近づいて触さわってみたら。

サクラ さわってみたら。

ツバキ うん。うん。

ミズキ いやいや、ここでわかるから。(舞台の端で舞台袖ぶたいそでを見ながら。)

沙磐、眼めを覚さます。

ミズキ 生きてるじゃない。

マユミ そうですよ。生きてますよ。

沙磐 イキテマスヨ。

沙磐の突然とつぜんの発言に、ミズキ飛び上がって驚おどろく。全員尻しりもちをつく。

沙磐、体おを起おこす。

マユミ 生きてますね？

沙磐 イキテマスネ。

ミズキ 生きてますね。

沙磐 イキテマスネ。

サクラ いきてますね。

カエデ 本当だ、生きてますね。だって、しゃべってるもん。

アベマキ 後の二人は？

カエデ覗のぞき込む。

カエデ 大丈夫じゃない。

モミジ 息してますかあ。

マユミ 息してますよ。

サクラ いきてますよ。

ツバキ うん。うん。

カエデ じゃあ、大丈夫だ。

ミズキ 女の人と、おじいちゃんは生きてますか。

沙磐 オンナノヒトトオジイチャンハイキテマスカ。

ミズキ だから、こっちが聞いているんだよ。  
沙磐 キイテルンダヨ。

カエデ、マユミ三人に近づくと。  
カエデ、沙磐に問いかける。

カエデ この人、お母さん？

沙磐 オカアサン。

モミジ こっちは、おじいちゃん？

沙磐 オジイチャン。

ミズキ すげえ、何でちゃんと話ができるんだ。

モミジ あなたは、怖がり過ぎ。そんな態度だと、ネズミにもかじられるわよ。

ミズキ うえええ、ネズミ怖い。

カエデ いつもサクラちゃんと遊んでるから。ね、サクラちゃん。

ツバキ うん。うん。

ミズキ よし。もっとサクラちゃんと仲良くなるぞ。いい、サクラちゃん。

サクラ いい、サクラちゃん。

ミズキ ツバキともはなしができるようになるぞ。だめ、ツバキ？

ツバキ うん。うん。

ミズキ、がっかりする。

マユミ 修行しゆぎょうが足りないわね。ツバキちゃん。ミズキちゃんが友だちになって  
だって。

ツバキ うん。うん。

ミズキ やったあ。友だち、ふえた。

沙磐 トモダチフエタ。

アベマキ そうだね。この大きな子も新しいトモダチ。

カエデ よろしくね。

沙磐 ヨロシクネ。

小人族の子と、沙磐は笑顔であいさつを交かわす。

第五景 董色すみれいろ 母の想い

その時、老人と母が、意識を取り戻す。

老人 ここは、どこだ…。

母 ええ。

老人 どこか、洞窟の中のような。

母、上の方を見上げる。

母 天井に穴があって、光が見えます。

老人も同様、上を見上げて。

老人 ああ、あの穴から落ちたんだ。

母 沙磐が蝶を取ろうとして、崖から落ちかけて…。

老人 それを助けようとしたお前が落ちて…。あっ、そういえば、俺も立って歩いたぞ。

母 やれば、できるんですね。

沙磐 ヤレバデキル。

母 そうね。…誰も怪我をしていない。

老人 ああ。

母 ああ、良かった。

老人 良かった？

母 怪我をしなくて…。

自分の発言のおかしさに気がついて、ほほ笑む。

母 この、気持ちの本心なんでしょうかね。

老人 そうかもな。

二人の会話を恐る恐る聞いていた、小人の子どもたちが、ざわつく。小人たちの気配に母、気がついて辺りを見回す。

小人族の子、マユミが、意を決して話しかける。

マユミ はじめまして。  
母 …誰かいるの？  
ミズキ いますよ、下、下。もっと下です。

母、老人、ぐるりと洞窟内の様子を見た後、足元に目をやる。

母 うわっ。小人！

老人 これは、すごい。

カエデ 怖がらないでください。

ミズキ 私たちの方がよっほど、ドキドキしてるんですから。

老人、足元の方にそっと呼びかけるように話す。

老人 そりゃあ、そうだ。あんたたちから見れば、わしらは巨人だ。踏みつぶ

されるかも知れんからな。

サクラ ふみつぶす？

老人 そんなことはしない。第一、俺は左足がいうことをきかなくて、うまく

歩けない。

カエデ ふふっ。あたしと一緒にだ。

アベマキ そっちの二人もふまない？

沙磐 ソッチノフタリモフナマイ。

母 そうね、大丈夫。踏みつぶしはしないわ。気をつけるから。ただ、

マユミ ただ。

母 小人を見るのが初めてなので、気持ちの整理がつかなくて…。

アベマキ 同じね。私たちも『ヒト』を見るのは初めてよ。

子どもたち、ササツと一か所に集まってくる。

カエデ こんにちは、はじめまして。わたしたちは、ラクヨウの子どもたち。

沙磐 ラクヨウノコドモタチ。

サクラ ラクヨウの子どもたち。

母 あら、あなた。沙磐ににてるわね。

サクラ にてるわね。

老人 本当だ。  
母 よろしくね。  
サクラ よろしくね。

沙磐、ラクヨウの子たちと話して、遊んでいる。

母 こんな、沙磐を見たのは初めてよ。  
マユミ えっ。

母 学校じゃ、からかわれたり、ばかにされたり。  
アベマキ どうして？

母 どうしてって？同じことくりかえして話をするから。  
マユミ どうすればお話ができるか、考えてあげればいいのに。

カエデ サクラちゃん。おはなしできるよね。  
サクラ できるよね。

カエデ サバンくんも、おはなしできるよね。

沙磐 オハナシデキルヨネ。  
母 きみたち…。

老人 こんな、世界もあるんだ。長く生きてみるもんだ。  
母 そうね。

老人 わしも、この年だが、生きることにもうすこししがみついてみようと思えてきたぞ。

母 そうね。

母、車椅子を、老人のところにもって来ようとする。ツバキ、サクラ、それを手伝おうとする。

老人 ありがとう。  
ツバキ うん。うん。

老人 でも、大丈夫だ。もう、これは使わん。きみたちの近くで、この車は危険きけんでしょうが無い。

子どもたち、何かを思いついて、舞台袖ぶたいそでに去る。

老人 少し、がんばってみれば、立って歩けることがわかった。あきらめないでみよう。

沙磐 アキラメナイデミヨウ。

老人 そうだ、あきらめないでみよう。

母 父さん。

老人、意を決して立ちあがる。

子どもたち（にとつては、）大木を、重そうに運んでくる。

子どもたち、大木を頭の上に掲げる。

アベマキ これ、使って。

老人腰を折って拾い上げる仕草をする。

子どもたちの運んできた木は、舞台袖にするする消えて行く。  
と同時に、1 mほどの木を老人が拾い上げる。

老人 おお。これは良い杖だ。これを頼りに歩いてみよう。ありがとう。

老人、笑顔で小人に礼を言う。  
子どもたちも笑顔で応える。

母、中央で、じいっと自分たちを見つめているモミジに話しかける。

母 みんなは、ここに住んでいるの？

モミジ、きよんとんとしている。

アベマキ モミジは聞こえないんだ。だから、こうするの。

アベマキ、手振り<sup>てび</sup>りで、伝える。

アベマキ 『ヒト』が、モミジと話したいんだって。

モミジ ……いいよ。

母 手話もできるの？

アベマキ シュワってなんだか知らないけど、音でわかってもらえなかったら、手とか体全部で伝えればいいでしょう。あたりまえじゃない。

老人 あたりまえだな。ははははは。

沙磐 あたりまえ。あたりまえ。ははははは。

母 ここにすんでるの。

母、手話もどきジェスチャーを使って話しかける。

モミジ み・ん・な・で、にげてきた。  
老人 にげてきた？

マユミ 私たちの郷が、シンヨウ族に焼かれて、逃げてきたの。

母 シンヨウ族？

ミズキ 私たち、『小さいものたち』の違う種族。

老人 違う種族…。

ミズキ 私たちを追いだして、私たちの住んでいる場所に住もうとしているの。

老人 人間と同じなんだな。

母 悪い人たちなのね。

カエデ 違うわ。シンヨウ族も、住むところを『ヒト』にうばわれて、しかたなく私たちの郷に来たの。悪くは無いわ。

アベマキ 悪いのは『ヒト』…あつ。「めんなさい」。

老人 人間が悪いのは、本当のことだ。

マユミ 『ヒト』がみんな悪いわけじゃない。あなたたちは、悪い『ヒト』じゃないと思う。

母 そう言ってくれて、ありがとう。

老人 きみたちは、本当に心やさしい種族なんだね。

その時、沙磐のおなががぐうっとなる。

カエデ おなかすいた？

沙磐 オナカスイタ。

アベマキ この奥にラクヨウの大人もいるわ。そこまで行けば、ごはんも食べさせてもらえるよ。

老人 ありがとう。

ミズキ さあ、行こう。

沙磐 サア、イコウ。

7人の小人の子どもは、三人を穴の奥へと案内するような仕草で消えて行く。

老人、杖を頼りに、歩き出す。沙磐と母、それを支えるようにしながら、消えていく。

転換

第六景 群青 シンヨウの憂い

場面は、会場に移る。会場のそれぞれの方向から、シンヨウ族が現れる。

会場が焼失した原野という設定である。

7 2 3 焼けましたね。

6 2 3 目的は達成しましたね。

6 3 4 いや、いや、まだだ。

1 0 3 これはまだ準備段階。

5 6 3 ラクヨウの全滅を確認しなければ、次の段階には進めない。

シンヨウのメンバー、舞台にたどり着く。転換された舞台に明りがつく。

舞台に明りがつくと、舞台奥遠景に一人の女（アズサ）が身を潜めている。

6 2 3 高原にこんな穴が開いているとは…。

7 2 3 奴ら、ここから落ちたか。

5 6 3 それにしては、穴が大きすぎる。

6 3 4 ここからラクヨウは、落ちてはいない。

7 2 3 誰かが、落ちた形跡があります。

6 3 4 『ヒト』だ。

1 0 3 『ヒト』？

7 2 3 『ヒト』が、ここにやって来たというのか。

1 0 3 奴らは『ヒト』と接触しているかも知れん。

5 6 3 それは、まずい。

1 0 3 一刻も早く奴らを見つけ出せ。

6 3 4 御意。

5 6 3 早く見つけださなければ…。

6 3 4 この先に、奴らはいる。

7 2 3 どうしてわかるんですか。

6 3 4 風に温あたかいゆらめきが感じられる。  
6 2 3 ゆらめき。  
6 3 4 生きている者たちがこの中に多くいる。  
1 0 3 行け。

7 2 3と6 2 3は、一人ずつ、穴あなに飛び込んで行く。  
1 0 3と5 6 3と6 3 4が残る。

1 0 3 『ヒト』は、なぜわれわれシンヨウ族を毛嫌けきらいするようになった。  
5 6 3 『ヒト』はきまぐれですからね。

1 0 3 あれだけ、どこの山も我々の一族で覆おおい尽くすことに貢献こうけんしてくれていたのに。

6 3 4 我々の花の粉が、体に害がいを及ぼすとか申もうすようになってからだ。我々の種族しゅぞくを切り倒たおした後は、ラクヨウの森にし始めたのは…。

1 0 3 本当に、気まぐれなものだ。

5 6 3 このままでは、またヒラニワの大地が全て、ラクヨウ族で覆おおわれるようになる。その前に自分たちの手で、この大地をシンヨウの森に…。

6 3 4 やつらを『ヒト』と接触せつじやくさせてはなりません。『ヒト』は、何をたくらむかわかりません。

5 6 3 その通り。それでは、一足先に行いって、道筋みちすぢをつくっておきますゆえ…。

5 6 3、穴に消える。

1 0 3 ひとつ聞いても良いか。

6 3 4 何なりと。

1 0 3 あ奴やつが申まうしていた通り、我が種族をこの地に広めることは、本当に正義せいぎなのか。

6 3 4 見渡みわたす限りシンヨウで覆おおわれた森こそ、この世の楽園らくえんかと存ぞんじますが…。それが、奴の願い。

1 0 3 シンヨウで覆われた森は楽園か？

6 3 4 そのようぞ。

1 0 3 お前の願いは何だ。

6 3 4 『ヒト』が作り上げたものではなく、我々が作り上げる楽園ぞ。

この『ひのもと』の地が、我等の種で覆い尽くされれば、我々が花粉により、『ヒト』も住みづらい土地となるぞしよう。

自然を脅かす『ヒト』が減りさえすれば、この地ももっともって浄化されるぞしよう。

1 0 3 お前、よほど『ヒト』が憎いな。

6 3 4 ええ。辛酸をなめさせられ続けていますゆえ。

1 0 3 恐ろしい男だ。

6 3 4 …もっと別の何かをお考えで…。

1 0 3 いや。…我等も行くぞ。

6 3 4 …御意。

1 0 3 に続き6 3 4 も穴に消えて行く。

影に身を潜めていた女（アズサ）が動き出す。

アズサ あの男こそ、森を破壊せんとしている者だ。我が種族の掟を破っても、

あの男だけは許すわけにはいかない。

アズサは、シンヨウ族の後から、穴に滑り込んでゆく。

暗 転

第七景 褐色 ヒト族とラクヨウ族の交歓

場面は変わって、舞台前方、ラクヨウ族の住処。すみか

シラカバを中心に、カシワ・ソウシ・ウダイ・シロブナ・クロブナ・コナラ・クヌギが、火を焚き、縄をない、食事の用意をしている。

薄暗い洞窟の中とはいえ、それなりに満ち足りた生活を行っている様子がかがわれる。

そこへ、子どもたちがやってくる。

ミズキ おじい。お客だ。

舞台後方に、母・老人・沙磐が現れる。

カシワ おお。…『ヒト』か。

クヌギ 『ヒト』

クヌギ、瞬間的に身構える。しゅんかんてきみが

ウダイ クヌギよ。それが良くない。誰でも戦おうとする意思を感じれば、戦う

気が無くても敵意を持ってしまふ。それを先に放つものは、弱い心を持つものじゃ。

クヌギ …すみません。しかし、わが一族は『ヒト』に…。

ソウシ 気持ちわかる。復讐の心は新たな復讐を生む。みくしゆう

クヌギ わかっております。わかっておりますが、そう思えるほど、私の心は完成されてはいない。

カシワ その思いを持っていて、あたりまえなんだ。

クヌギ えっ。

カシワ 皆、悟りをひらいたら、争いも無くなる。まど

クヌギ そうだ。

カシワ じゃが、そんな世界なんて、実につまらない。

シロブナ それでも、あたしは、争いの無い世の方がいい。

カシワ そう思うことも、大事なことだ。

シロブナ あたしは、シンヨウの奴らがゆるせない。

クロブナ 俺の光をうばった。

コナラ アズサの命を奪った。

沈黙が辺りを包む。

老人 いやあ、すみません。何やら大変な時に迷い込んで。

カシワ …何も気を使うことはございません。

老人 そちらにいらっしやるお嬢さんは…。

老人、他のものとは一線を画するシラカバの雰囲気を感じ、問いかける。

ソウシ 我らが姫君だ。

ウダイ 我らが一族の姫君、シラカバ様だ。

老人 それは失礼した。姫様に、お嬢さんなんて言ってしまうて…。

沙磐、シラカバに近づく。

母 あっ。沙磐。

シラカバ こんにちは。

沙磐 コンニチハ。

シラカバ、手にもっていたドングリまんじゅうを見せる。(会場斜め上方向へのしぐさ)

シラカバ 食べる？

沙磐 タベル。

沙磐にまんじゅうを手渡す。(しぐさ)

沙磐、豆粒のようなまんじゅうを笑顔で受け取る。(しぐさ)

一口で食べてしまう。

シラカバ どんぐりまんじゅう、おいしいですよ。

沙磐 ドングリまんじゅうオイシイデシヨ。

シラカバ じいがつくった。

沙磐 ジイガツクッタ？  
シラカバ そう。じいがつくった。

シラカバ、カシワを指さす。沙磐、カシワの方に目を向ける。  
カシワ、ゆっくりとほほ笑みながらうなづく。

シラカバ おいしい？

沙磐 ドングリマンジュウオイシイデシヨ。

クロブナ、驚きの表情を見せる。

クロブナ 姫様とこの『ヒト』の子の心が通じている。

シロブナ 『ヒト』でも、このような純真な魂を持っているものもいるのか。

三人の訪問者を警戒していたシロブナ、クロブナ、クヌギ、コナラも、警戒心を緩め、笑顔が見え出す。

カシワ 今宵は、我々ラクヨウ族と『ヒト』が初めて親交を深めることができた

日だ。宴を催すことにしてもよろしいかな。姫。

シラカバ うたげじゃ。うたげじゃ。

沙磐 ウタゲジャ。ウタゲジャ。

それを聞いた、子どもたちは歓声をあげて、宴の準備に取り掛かる。

子どもたちは、音楽に合わせて踊りだす。

大人たちも含めて数人で演奏を始める。

宴は盛り上がりを示す。

### ※ ヒップホップダンス

### ※ 『楽竹団』演奏

沙磐は、シラカバと会話を楽しんでいる。カシワ、ソウシ、ウダイはそれをほ

ほえましく見守っている。

老人は、子どもたちと共に、満面の笑みで一緒に歌っている。

## 第八景

薄紅色

桃源郷

母は、シロブナ、クロブナ、コナラ、クヌギと静かに話し出す。

コナラ　これだけ、飲んで食べて笑って楽しめたのは、久しぶりだ。

母　私もです。

小人族と母、視線を合わせてほほ笑みあう。

母　皆さんはどうしてここに？

クヌギ　…逃げてきたんだ。

母　逃げてきた。

シロブナ　そう。

母　それじゃあ、あたしと一緒にだ。

クヌギ　敵に追われているのか。

母　追われていたのは確かね。でも、敵は自分。

コナラ　自分に追われてた？

シロブナ　自分が敵？

クヌギ　『ヒト』の言うことはよくわからない。

クロブナ　だから、『ヒト』と付き合うのは難しい。

ソウシ　しかし、だからこそ、『ヒト』は面白いのだ。

老人　そうだ。『ヒト』は面白いぞ。

沙磐　『ヒト』ハオモシロイゾ！

母　私が暮らしていた世界っていったいなんだっただろう。

シロブナ　あなたが暮らしていた世界？

母　たくさんの方がいるのに、世界の中で取り残されているのは自分だ

けだっと思っていて。どうして、自分だけがこんなに苦勞しなければなら  
ないんだらうって思っていた。

コナラ

そう。

母 でも、そう思い込んで自分を苦しめていたのは自分だって…。あなた  
たちに会って気付くことができた。

クヌギ

誉められたのか。

母

ありがとう。こんな暗い洞窟の中なのに、世界はとても明るく見える  
ようになったわ。

シロブナ

『ヒト』は、その時の周りの様子によって世界の見え方が違うんだね。

ソウシ

そうだ。

ウダイ

だから、面白い。

母

ここは、パラダイスのようだわ。

シロブナ

ばら…。

母

桃源郷。

クヌギ

どうしてだ。

母

障がいがある無しに関わらずに、みんな同じ目線で生活している。

ミズキ

障がいつて何だ。

母

えっ。

カシワ

『ヒト』族だけが持っている、仲間をはかるものさしだ。

母

『ヒト』だけが持っている…。

ソウシ

わしらの中には、初めからそういったものさしが存在しない。

ウダイ

だから、はかれない。

カシワ

はかる必要もない。

老人

お前も、そのものさしをなくせば楽になる。

母

そう、ここに来て、そのものさしが消えましたよ。

カシワ

ほう。

母

誰が決めたかわからない、そんなものさしの寸法の中に収まろうと  
してもがいていた。

老人

おまえがそのものさしにこだわっていることが気がかりでならなか

った。沙磐は、ものさしでは測れないところの子だし、俺もいつの間にか、ものさしで測れば規格外きかくがいになってしまった。ものさしがないと、すごく生きやすいよな。

母 父さん…。父さんが規格外だなんて…。

老人 わかっている。わかっている。

母 私は周りの奇異きいの目や同情どうじょうの目を受け流せるほど、強い人間じゃなかったの。

老人 そんな強い人間なんかいるものか。

母 この人たちとなら、心を包み隠つつして生活くわくしなくても良いから、生きていけるかもしれない。ううん。生きていけるわ。

老人 ここに來られてよかったな。

母、うつむいて涙する。  
その様子を、沙磐が感じて、近づいてくる。

沙磐 ナカナイデ。ナカナイデ。

老人 沙磐は、本当にいい子だ。

母 …ええ。

静かな音楽と共に溶暗転ようあんてん。

## 第九景 青藍せいらん 目前の遠方

舞台後方こけりがほのかに明るくなってくると、鍾乳石しゅうにゅうせきに彩られた世界が続いている景色が映し出される。そこに、シンヨウの三人、634、563、723が、現れる。

623 もうすぐたどり着きますかね。

563 もうすぐなはずだ。

723 どうも、同じところをグルグル回っているような気もするんですけど。

563 洞窟の中だ、…そう…見えるだけだ。

563、その場にへたり込む。

6 2 3 どうしました。  
5 6 3 何でも無い。ちょっと、このあたりの様子を調べようと思ってな。  
7 2 3 へばったんですよね。  
5 6 3 うるさい。お前たち先に行ってる。すぐに追いつく。  
6 2 3・7 2 3 へいへい。

6 2 3・7 2 3、舞台下手側に去る。

5 6 3、懐からたばこ(キセル)を取りだして、一服し始め、客席に向かって語り始める。

5 6 3 ポーカーフェイスで悪役やるつても、なかなか大変なんですよ。良いじゃないですかね。煙草の一服くらい。…(いろいろ、適当に愚痴る。)

そこへ、上手側から、6 2 3・7 2 3が現れる。

6 2 3 あれ、早いじゃないですか。どんな技使ったんですか。

5 6 3 いや、テレポーテーションだ。

7 2 3 瞬間移動、テレポーテーションですか。

5 6 3 そ、そうだ。

6 2 3 まさか、やっぱり同じ場所をぐるぐる回っていただけだなんてことは無いですよ…。

5 6 3 そ、それだ。わしは、それを確かめたくて、ここに残っていたんだ。

くそう、カンバソウシ・ウダイめ。まんまと罠にはめられたわ。

7 2 3 行きどまりですか。

そこへ、1 0 3と6 3 4現れる。

1 0 3 どうした。

6 2 3 行きどまりでした。

7 2 3 どこかで道を間違えたんですかね。

1 0 3 ここまでは一本道だ。道は間違っではない。

5 6 3 本当にここに逃げてきたんですかね。

6 3 4 間違いはない。

5 6 3 では、ここからどこに行ったというんだ。もう、行く道は無い。

6 3 4 こっちだ。

6 3 4 は、すつと上を指さす。よくみると、岩を少し登った先に縄梯子が仕掛けてあるのが見える。

6 3 4 なかなか巧妙な立体迷路だ。

5 6 3 近いかな？

6 3 4 遠くは無いでしよう。

1 0 3 行きつけるのか。

6 3 4 巧妙ではありません。しかし、やつらの仲間には、手足の自由が利かない者もおります。それらが移動できる範囲を考えて探索すれば、必ずや足跡が残されているものと考えます。

1 0 3 さすがだな。頼りにしているぞ。

6 3 4 身に余るお言葉、ありがとうございます。さあ、行きますよ。

6 3 4、壁に手をかけて登り始めようとする。

暗 転

## 第十景

白濁 対峙

場面は、舞台前方のラクヨウの隠れ里のエリアにゆっくりと明りが移ってくる。ラクヨウ族の皆は寝も終わり、静かに眠りにについている。熾き火となって、またたきながら明滅している焚火の後のほのかな明かりで、ラクヨウの小人たちの様子が薄紅く映し出されている。

次第に舞台後方にも明りが広がってゆくと、沙磐たち『ヒト』も静かに眠りにについている様子が映し出されてくる。

そこへ、シンヨウ族がたどり着く。シンヨウ族は、客席の上手側から、舞台のラクヨウ族の様子を窺っている。

7 2 3 ついに見つけましたよ。

6 2 3 居なかったらどうしようかと思いましたよ。

7 2 3 始末書もんですよね。

5 6 3 何だ、その役所的な発想は。

6 2 3 そうさせているのはあなたですからね。

5 6 3 俺か。

7 2 3 これが終わったら休暇くださいね。

5 6 3 だから、役所や会社じゃないって。

6 2 3 じゃあ、何なんですか。

5 6 3 …運命共同体だ。  
うんめいきょうたい

7 2 3 うわっ。無理っすね。赤い糸で結ばれた運命の人ですか。無理っす。  
5 6 3 そんなんじゃない。だから…。

そこへ6 3 4、1 0 3が現れる。

1 0 3 よくぞたどり着いた。

7 2 3 これくらい、どうってことないです。

5 6 3 お前のおかげではない。

7 2 3 そうっすか。失礼しました。

6 3 4 さて、どう料理しますか。

6 2 3 煮るか。

7 2 3 焼くか。

5 6 3 へし折るか。

6 3 4 切り刻むか。

1 0 3 我がシンヨウ族をばかにした罪は重い。…焼け。

6 3 4 承知しやうちしました。目覚めぬ間に、火を放て。

6 2 3・7 2 3 はっ。

6 2 3・7 2 3、持っていた松明に火をつけようとした時、竹笛の音が響き渡る。笛の音に驚き目覚めるラクヨウの人々。そして、『ヒト』。

アズサ シンヨウ族が来たぞ。

会場、中央で笛を吹くアズサ。目覚めたラクヨウの面々がアズサを、その眼中にとらえる。

コナラ アズサ！

アズサ 逃げろ！シンヨウ族だ！

アズサの声と共に、機敏に動き出すラクヨウ族。

ラクヨウ族の子らはてんでバラバラになり、会場通路を駆け巡り逃げ回る。

ラクヨウの大人もそれに続き、会場に駆け降りる。

『ヒト』の母は、老人を連れ、傍に沙磐を伴いながら逃げる。老人は足を引きずりながらも、歩く。

6 3 4 追え！

7 2 3・6 2 3 はっ。

ラクヨウ族を追うシンヨウ族。会場のあちらこちらで一進一退の攻防が繰り広げられる。

ステージ上の様相が変わっている。(明りを使って微妙な変化を表現してもよいし、転換して別の場所にしてもよい。)

ラクヨウ族は知らず知らずのうちに、洞窟の奥の奥、自分たちも足を踏み入れたことのない場所までどんどん進んでいた。

シンヨウ族は会場にまんべんなく散らばるシフトを敷き、ラクヨウ族をステージ上に追いつめる。

ステージ上段にはまた、『ヒト』が現れる。

ラクヨウ族はステージ中央に身を寄せ合うようにひと塊になるほど、シンヨウ族に追いつめられる。

7 2 3 さあ、観念しろ。

6 2 3 ここが、ラクヨウ族の最後の場所だ。

ウダイ 待て。

5 6 3 この期に及んで命乞いか。カンバウダイ。

ウダイ わし等、老い先短いものはどうでもよい。ただ、この子どもたちだけは、生かして欲しくないか。

1 0 3 甘い。根絶やしだ。

ソウシ なんと、惨い<sup>むい</sup>。

クロブナ 我々が、シンヨウ族に何をした。

5 6 3 何もしてはいない。ただ、我々が生きて行くために邪魔なだけだ。

シロブナ そんな理由で、我々を消そうというのか。

6 3 4 人間を見る。自分たちの生活と安全を守るため、オオカミを絶滅させ、熊を殺し、我々の種族も切り刻み、自然の営みを断ち切ってきている。

1 0 3 ここまで壊した自然は誰かの設計通り作り上げていかなければ、維持できはしない。

カシワ そうかな。受け入れるべきを受け入れ、なすがままに自然の営みに任せれば、自然の力で最良の環境に戻るかもしれん。

5 6 3 まやかした。

ウダイ お主も本当にそう思っているか。我々が共に暮らす道は望めるのではないか。なあ、アスナ口。

1 0 3 その名を口にするな。我等は名を捨てた。『ヒト』にナンバーをつけてもらって『ヒト』に使われることだけを一生の夢とし、生き続けてきた。

それが、我らシンヨウ族。

ソウシ 何がお前をそうさせた。お主は、明日を夢見て、明日の成長を願って明るく前向きに生きてきただろう。アスナ口。

1 0 3 その名を呼ぶなど言っている！火を放て、こいつらを皆焼き尽くすのだ！

7 2 3 ・ 6 2 3 火を放とうとする。

老人 悪かった。

1 0 3 ∴ 『ヒト』

老人 人間の生活のことだけを考えて、森の生態系を壊し、家を建てるために必要な針葉樹だけを植えてきた。それが、俺の体がこうなるまでにしてきた仕事だ。火で焼くのなら、俺だけにしろ。

5 6 3 木を切った『ヒト』か？

6 3 4 木を植えた『ヒト』か。

老人 悪かった。人間の都合で木を切り倒したり、木を植えたり…。挙句の果ては、植えた森をそのまま放置し、森をズタズタにしている。悪かった。

シラカバ わるくない。

老人 えっ。

シラカバ この人も悪くない。こっちも悪くない。

沙磐 こっちもワルクナイ。

シラカバ 悪いのは…。

カシワ 悪いのは？

シラカバ 悪いって思うこと。

ウダイ 姫。

シラカバ じぶんもわるい。このひともわるい。そっちも悪い。みんな同じ悪いなら、悪いはないよ。

ソウシ そうですね。

シラカバ だから、やめよう。みんなトモダチなんだから。

5 6 3 トモダチ。

シラカバ そう、トモダチ。

沙磐 みんな、みんなトモダチ。

カシワ、5 6 3 に向かって。

カシワ もう一度、いっしょにヒラニワの郷を作り上げてはみないか。イチイ。

5 6 3 久しぶりにその名を呼ばれた。

ソウシ 我らラクヨウが居て、お主らシンヨウが居て、

ウダイ はじめて森は、遠い未来まで生き続けるのだ。

ソウシ そうだろう。クロマツ。

ウダイ アカマツ。

7 2 3 (クロマツ) ・ 6 2 3 (アカマツ) うなだれる。

カシワ スギもアスナロと一緒に『ひのもと』にしか無い種だ。しかし、一つの

種だけで、全てを埋め尽くすことの愚かさはわかっているだろう。

6 3 4 俺は、俺は、騙されんぞ。俺は、他の奴とは違うんだ。

カシワ 他の奴。

6 3 4 シンヨウも含めて皆だ。

5 6 3 シンヨウも含めて…。

6 3 4 シンヨウ族とひとくくりにしたとしても、我等は違う。我等は『ヒト』  
に選ばれた種なんだ！『ひのもと』は…、『ひのもと』の土地は、我々シ

ンヨウのスギ族によって、山林を全て埋め尽くすはずだった！

1 0 3 お前！

6 3 4 しかし…。あれだけ『ヒト』に大切に育てられていたのに、今では花粉

をとぼして害を及ぼすと、厄介者の代名詞だ！「必要だ！邪魔だ！」と、

『ヒト』にもてあそばされるのもうごめんだ…。

ウダイ 待て！

1 0 3 火を放て！我等と共に、燃え尽きればいい！

6 3 4 ラクヨウを滅ぼすと言いながら、自分たちも滅びようとしていたのか

1 0 3 そうだ。

6 3 4 それが、本心か！

1 0 3 …そうだ。

6 3 4 ラクヨウもシンヨウも、みんな消えても、俺は生き延びる！みんな死ん

でしまえ！俺だけは生き延びる！

アズサ お前だけは許さん。

アズサ、短剣を持って6 3 4に襲い掛かる。

その間に、コナラが入る。

アズサ コナラ、なぜ止める。

コナラ 『争うくらいならば滅びよ。』

アズサ ラクヨウのおきてか。

コナラ シンヨウ族に我等はどれだけ苦しめられてきたのか、わからないのか。

1 0 3 ゆるせ。全ての悪は燃え尽きる。お前の苦しみも、これで終わる！  
6 3 4 それでは、『ヒト』に、復讐できない！

アズサ それでは、シンヨウに復讐できない！

1 0 3 『復讐』は『復讐』を呼ぶ。

6 3 4・アズサ しかし、この行き場のない思いはど「へ」ぶつければいいんだ。

1 0 3 我等はラクヨウのように耐え忍ぶことはできない。だから

6 3 4 だから

1 0 3 皆、いなくなってしまうえば良いのだ。

1 0 3 松明を高々と掲げる。

母 それは違う！

1 0 3 ……。

母 死んでどうなるというの。死んでしまえば、全部終わるといふの？残された人たちに、苦しみや悲しみを押しつけるだけじゃないの。

1 0 3 だから、一族皆で！

母 生きたいと思っている小人族はどうするの。生きたいと思っている皆も道連れにするのはわがまま過ぎるわ。辛い思いでも、皆で少しずつ分け

れば、少しは減るかもしれないわ。そうやって、生きて行かなきゃ。

老人 お前…。

6 3 4 我等を苦しませ続けている『ヒト』のことばだ。惑わされるな！

母 生きましょう。

1 0 3 ……。

母 生き抜きましょう。

6 3 4 火を放ちますぞ！

1 0 3 ……。

アズサ コナラ、離せ！

それでもコナラはアズサを離さない。

634 だから、『ヒト』は嫌いなんだ！

634、ついには火を放つ。

洞窟内が、一瞬にして火の海となる。

アベマキ 助けて！

モミジ 助けて！

サクラ 助けて！

逃げ惑う小人族。

634 みんな、みんな、燃えて無くなればいいんだ。世界は燃え尽きれば良いんだ！

634 炎の中心に立ちつくす。そのそばに103が近づく。

103 もう、いい。無理する必要は無い。共に滅びよう。

563 そんな、選択も、あるにはあるか。

103、634立ちすくす姿がシルエットになる。

モミジ みんな、逃げよう。

アベマキ あれ？

マユミ 帰る道は？

サクラ 帰る道は？

カエデ 帰ることができる？

サクラ カエルコトデキル？

コナラ 道がわからない！

ミズキ 来た道を帰ることができる？

クヌギ 無理だ。

アズサ 逃げるの精一杯で、誰も道を覚えていない。

563 どうかしろ。

ソウシ どうかしろって言っても、

ウダイ (煙に巻かれて咳き込む。)このままでは、シンヨウ・スギ族の男と、

アスナロが燃え尽きてしまうぞ。

カシワ クロマツ、アカマツ。助けるぞ！

6 2 3 しかし。

カシワ お前たちの思いで動いて構わん。シンヨウの仲間を、お前たちはどうし

たいのだ。

7 2 3、良く考えたあげく、6 2 3の目を見て。

7 2 3 行くぞ！

6 2 3、頷くと、7 2 3と共に、6 3 4、1 0 3を炎の中から引きづり出す。

1 0 3 何をする。皆、みんな燃え尽きてしまえば良いんだ。

6 2 3 生きましよう。

7 2 3 そう、生きましよう。そうすれば、今まで見えなかった何かが見えるかもしれない。

6 3 4 今まで見えなかった何か…。

5 6 3 生きるという選択もある。

1 0 3 生きるという選択。

5 6 3 死に場所を探していたのですね。ラクヨウと共にシンヨウも…。

1 0 3 ゆるせ。皆を欺いていた。

5 6 3 いきましよう。

1 0 3 ……。

1 0 3 頷くと、6 2 3、7 2 3に抱えられて動き出す。6 3 4は、5 6 3に抱えられる。

6 3 4 皆、同じ志を持っていたと思っていたのに…。

5 6 3 同じ向きには動いていた。

6 3 4 これで良かったんだらうか。

5 6 3 これが、結果だ。受け入れるしかない。

マユミ もとの場所に帰ることができるよね？

沙磐 モトノバシヨニカエルコトデキル。

全員、沙磐を見る。

沙磐 こつち！

走り去る沙磐。

母 沙磐！

老人 沙磐を追いかけるぞ。

母 はい。

カシワ 『ヒト』の子についていけ。

シロブナ わかりました。

アズサ 子どもたちも、一人も忘れずにつれて行くよ！

クヌギ もちろんだ！

ソウシ シンヨウもだ。

563 カンバソウシ…。

ウダイ スギ族も含めて、どの種も絶やしてはならない。

563 …皆で、日の光を見るぞ。

カシワ そうだ。『イチイ』

沙磐 みんな、コッチオイデ。ミンナ、トモダチ。ミンナ、カエル。

会場を炎の赤い光と、煙が覆い尽くす。

小暗転

## 第十一景 浅葱 後に残るもの

煙が立ち込める会場から、次第に煙が消えてくる。

すると、舞台の上部の空間から、沙磐、母、老人が現れる。

そして、時間をおいて、舞台の下部の空間から、ラクヨウ族、そしてシンヨウ族が次々と現れる。

皆が現れた場所は、シラカバの林が燃えずに残されていた、ヒラニワの山頂  
付近。  
ふきん

シロブナ ここは…。

サクラ ココハ。

563 ヒラニワだ。

クロブナ 助かったのか。

沙磐 タスカッタ。

ツバキ うん。うん。

アズサ シンヨウも

6 2 3 ラクヨウも

クヌギ そして『ヒト』も、

沙磐 みんなみんなタスカッタ。

7 2 3 助かった。

シラカバ …ありがとう。

1 0 3 えっ。

シラカバ ありがとう。

1 0 3 誰に？

シラカバ えっ。

1 0 3 誰にありがとう。

シラカバ 誰に…皆に

1 0 3 えっ。

シラカバ みんなにありがとう。

6 3 4 俺もか。

シラカバ そう、あなたも。みんなにありがとう。

沙磐 ミンナノアリガトウ

シラカバ 生きていてくれてありがとう。

沙磐 イキテイテクレタアリガトウ。

老人 さあ、帰ろう。俺たちの世界へ。

母 …ええ。

老人 世話になった。

カシワ こちらこそ。…そのがいなければ、我々は全滅ぜんめつしていた。

老人 いや、いや。俺たちも、あんたたちに会わなければ全滅ぜんめつしていた。な。

母 …ええ。

ソウシ 大丈夫ですか。

母 ええ。もう少し、やって行けそうです。人間の世界でも…。

ウダイ 背せ伸びのはせずに。

母 そうですね。

老人 沙磐、帰るぞ。

沙磐 カエルゾ。

母 サヨナラよ。

沙磐 サヨナラ。

母 ええ、サヨナラよ。

沙磐 イヤダ。シラカバとあそぶ。  
母 沙磐…。

シラカバ、沙磐のそばに近づく。

シラカバ かあさまのいいつけはまもりましょう。

沙磐 カアサマノイイツケ。

シラカバ かあさまのいいつけはまもりませう。

沙磐 カアサマノイイツケハマモリマス。

シラカバ また、あそぼうね。

沙磐 また、アソボウネ。

老人 では。

沙磐たち、シラカバの森の中に向かって歩き出す。

三人のシルエットが光につつまこまれ、静かに消えてゆく。

## 第十二景 灯 ともしび そして未来へ

周りの景色に少しづつ緑が入りだす

103、つぶやくように話し出す。

103 我々の体が焼き尽くされようとも、その灰をこやしとして、新しい命が、  
育まれて行くのであれば、本望。ほんもつ 共に、次の世代のために滅びよう。自分

の気持ちを隠しながら、ずうっと…そう思っていた。

カシワ それも一理。いちり しかし、滅ぶ必要はあったか？

103 えっ。

シラカバ じい。みんな焼けたね。

カシワ ええ。

ソウシ、静かに周りを良く見渡しす。

ソウシ 姫、そうでもありませんよ。周りを良くみてごらんなさい。

シラカバ あれ、緑の草が生えている。

103も、周囲を見る。しゅうい

カエデ 草だけじゃないよ。  
マユミ 白い花もある。  
ミズキ 何だこれ、

緑の茂みの中に埋もれて生えている自分の頭ほどある白い花を、モミジ、手に  
とって良くみる。

シロブナ これは  
コナラ これは  
カシワ スズランの花だ。  
サクラ スズラン  
アベマキ スズラン  
ツバキ うん。うん。

ウダイ これだけ焼けたヒラニワの郷も、もうすでに再生を始めている。

ソウシ われわれも、この大地のように新しい世界を切り開いていかなければ  
ならないな。

クロブナ そうですね。

カシワ 生き残って、次の世界を切り開くことは辛いことかもしれない。それを  
背負いながら、生き続けることも必要なのではないかな。

カシワ、シンヨウの皆に語りかける。

634 そんな選択もあるのだな。

ウダイ …ある。

ソウシ 共に、生きよう。

シンヨウの者たち、うなづくとも、うなだれるともとれる仕草をとる。

耳の間こえないモミジがあたかもスズランの音が聞こえるように、ほほ笑み  
ながら耳元でスズランの花を振り続けている。

ラクヨウ族の子どもたちがみな笑顔でスズランの花を耳元で振りながら、幕  
が下りる。

終 幕

平成24年9月9日 脱稿

## 参考作品

- 『誰も知らない小さな国』作…佐藤さとる  
『床の下の小人たち』作…メアリー・ノートン  
『こびとづかん』作…なばたとしたか  
『アルジャーノンに花束を』作…ダニエル・キーヌ  
『ゴドーを待ちながら』作…サミュエル・ベケット

## 参考文献

- 『樹皮 ハンドブック』著…林将之  
『葉っぱ・花・樹皮でわかる樹木図鑑』校閲…高橋秀男